

II 3

学ぶためのスキルと作法

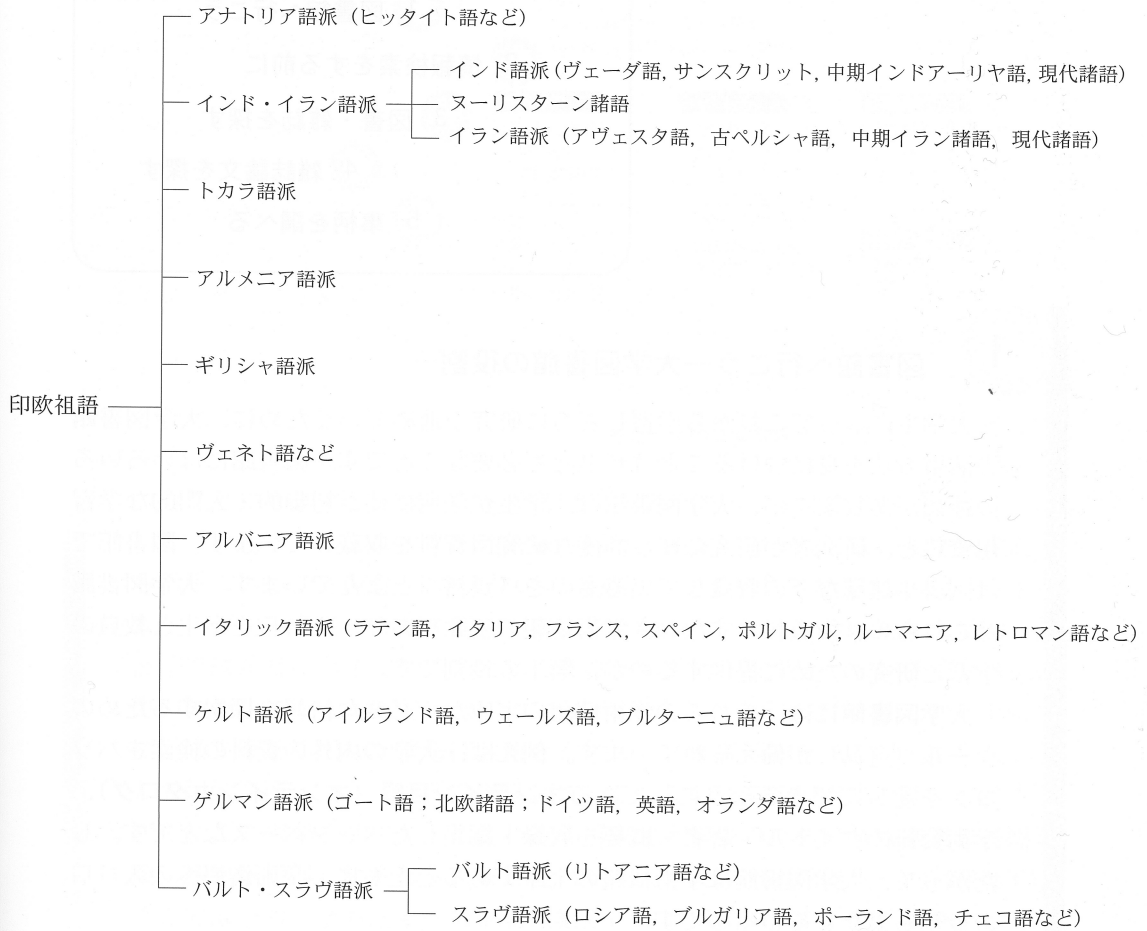
見出しに挙げられている語形に行き着くには、暗号解読のような作業が必要です。その分、謎が解けた時の喜びも大きいと言えます。文字も多少厄介です。

文法の中身は複雑ですが、「文法」とは丸暗記する性質のものではありません。私たちの理性が言語現象を対象として発見し、組み立ててゆくべきもので、実際の言語を既存の文法書に照らし合わせて納得することが求められているではありません。サンスクリットは現代語とは異なり、「習得する、こなす」ものではなく、あくまでも研究対象です。そのために必要なのは文献理解のための「研究文法」で、「規範・学校文法」ではありません。簡潔明解な原理から出発し、枝葉は後から加えてゆくのが正道です。複雑な規範を網羅した文法書は入門に適しません。また、インドの伝統学者が現在用いるサンスクリットは人工的擬古文の一種に過ぎないので、最近国内外で出版されている練習問題の多い文法教本も薦められません。初級文法を終えたら、Lanman 著 Sanskrit Reader に取り組むのが近道で、同書が常に指示する Whitney の Sanskrit Grammar を参考にするのが良いでしょう。文献研究に進めば独仏英語による文法書・研究書を総動員する必要があります。

辞書はとりあえず Monier-Williams の梵英辞典に頼りますが、最終的には1870年代に完結したドイツ語による7巻本 Böhtlingk-Roth を使うこととなります。サンスクリット、英語、独語の辞書を同時に広げて取り組むこととなります。多少の頭やセンスで歯の立つ対象ではなく、手を抜かず理詰めで取り組まねばならないことは、むしろ、学問研究があらゆる理性に平等に開かれた機会である証と理解したいものです。

サンスクリット文献学はインド・ヨーロッパ語族の言語文化を理解するための出発点でもあり、「東洋」「西洋」という概念を越えた人類史理解に正しい奥行きを与えてくれるはずです。B.C.1200年頃編集されたリグヴェーダから、ウパニシャッド、哲学諸派の文献、叙事詩、仏典、ヒンドゥー教文献、文学など、解明の待たれる原典が多量に残されています。ゾロアスター教の『アヴェスタ』やダリウスなどアケメネス朝諸王の碑文をはじめとするイラン研究の入口でもあります。これまでに積み重ねられた地道な研究を基礎に、サンスクリット文献学の真価が発揮される本格的研究はこれからです。

(後藤 敏文)



インド・ヨーロッパ (印欧) 語族系統図

込む覚悟を持つのです。自分が描き出した対象は自分の似姿でしかありません。しかしその姿にどれだけ生気を宿らせられるかは、この覚悟の深さにかかっています。渾沌説話の解釈者たちは、解釈する人間が引き受けるべき運命とのつきあい方を、まさに文献の解釈という作業をとおして示してくれたわけです。

(三浦 秀一)

3. 「輪廻」と「業」

Points

1 死後の道

2 輪廻と業

3 ブッダの沈黙

4 無我と縁起

5 四苦

1

永遠の問い

「私はどこから来てどこへ行くのか。」人間存在の根源的不安に基づくこの問いは、少し前によく読まれた『ソフィーの世界』を機に普通の会話にも登場するようになりました。古代インドの文献も、他の諸文明の哲学・宗教と同様、ある意味ではこの問いを巡って展開してきたと見ることができます。インドの特殊性は、祭官たちの祭式を巡る議論から始まったという点に求められるでしょう。

2

死後の道

インド最古の文献は紀元前1200年頃に編集された『リグヴェーダ』です。その最新層には、祭官（バラモン）のほか、軍事・政治を担当する王族・戦士（ラージャニヤ）、生産活動に携わる平民（ヴァイシヤ）、上位三階級に奉仕するシュードラの4つの階級区分が見られ、言語文化や知識は祭官階級に独占されていたようです。世界や生物界の発生、人の死後を巡る考察なども見られます。紀元前800年頃まで遡る「ブラーフマナ」文献は祝詞や祭式の意義付けを

III 人文科学の方法

3

集めたもので、その中に「祭式と布施の効力」に関する理論の展開が跡づけられます。祭式理論家にとって、死後のあり方（来世）を決定するのは人が現世で行う祭式と祭官に支払う布施とでした。それらの効力は天界に蓄積され、死後その人が天界に至ると返却されます。これを糧に人は天界での生活を享受し、尽きると天界で「再死」し、地上でその効力に応じた次生へ再生するとされました。その繰り返しが「輪廻」の出発点です。祭式と布施の効力が尽きることなく、再死を免れ、ブラフマン（原義は「ことばの実現力」）の世界で不死（アムリタ）を享受するという究極目標を保証すべく、祭官学者は理論化に努めました。

3 輪廻と業

紀元前600頃から成立する「ウパニシャッド」では、それまで問題とされてきた祭式行為が日常行為一般に拡大されます。「行為」に当たる原語はカルマン（単数主格形はカルマ）で、「業」と漢訳されますが、もともと「作る・為すこと、行為」を意味する日常語です。さらに、天界での滞在から地上への生まれ変わり方、現世へと重点が移り、ここに「業」と「輪廻（サンサーラ）」の理論が確立しました。人が欲望（カーマ）に基づいてなす善悪の「行為」は「知識」、「前世までの知恵（洞察力）」とともに天界に蓄えられており、死後、アートマン（「自己」：輪廻主体）が認識機能を伴って天界に至ると返却されます。アートマンはその蓄えによって天界に暮らし、蓄えが尽きると地上に再生します。地上でどの母胎に下降し再生するかを決定するのも前生までの行為・知識、そして知恵の三者です。以上が仏教や医学理論をも含む全てのインド思想の公理となった「業と輪廻」の原型です。ここには個人と両親・祖先をつなぐ理屈は見られません。輪廻は一個人だけの問題で、「親の因果が子に報いる」余地はありません。輪廻から「解脱」する道は、祭式によって獲得される天界での不死（ブラフマンの世界へ帰入）から、アートマンと宇宙の究極原理ブラフマンとの合一（梵我一如）、またはそれを真に知ることへと展開しました。